

戦略的イノベーション創造プログラム（SIP） SIP第3期 制度中間評価報告

令和8年3月19日
ガバニングボード決定



1. SIP制度中間評価の概要
2. 制度中間評価WG
3. アンケート調査概要
4. アンケート調査結果概要
5. SIP第3期制度・運用における改善すべき点と対応策
6. SIP第3期制度・運用における主な改善点・対応策

■ SIP制度評価にて検討すべき事項 (SIP運用指針より)

➤ 評価項目・評価基準

- ・計上予算（推進費）の在り方
- ・C S T I 及びG Bによる課題設定の在り方
- ・P Dの選定の在り方
- ・課題評価と機動的な予算配分の在り方
- ・P Dによる研究開発等の推進の在り方
- ・研究推進法人による予算執行上の事務手続きの在り方
- ・上記を踏まえた、S I Pの特徴である府省連携、関係府省の施策、産学の研究活動・事業活動等への影響
- ・S I Pの制度の改善点を抽出

➤ 評価結果の反映方法

- ・当該年度までの実績と次年度以降の計画等に関して行い、次年度以降の計画等に反映させる。

2. 制度中間評価WG

■ 第3期制度中間評価検討活動

① 第3期制度に関するアンケート及びインタビュー

→ SIP実施者、関係省庁、管理法人等を対象に実施。

② 若手研究者からの意見聴取

→ 東京大学 高取准教授（第1回WG）、多摩大学 樋笠准教授（第2回WG）。

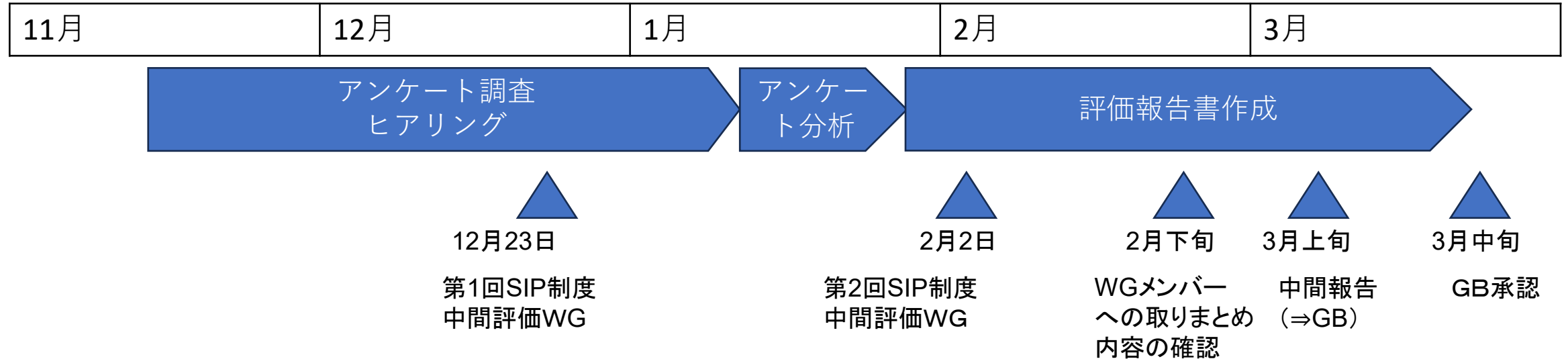
③ 国内外の研究支援施策制度紹介

→ 米国DARPA（第1回WGにて池野委員より紹介）、J-PEAKS（第2回WGにて長我部委員より報告）

【制度評価WG委員】(○：座長、50音順)

氏名	所属
池野 文昭	スタンフォード大学 主任研究員
長我部 信行	株式会社日立ハイテク コアテクノロジー&ソリューション事業統括本部 エグゼクティブアドバイザー
上條 由紀子	国立大学法人九州工業大学 社会実装本部未来思考実証センター 特任教授
川添 雄彦	NTT株式会社 チーフエグゼクティブフェロー
北岡 康夫	国立大学法人大阪大学 共創機構 機構長補佐（産学連携担当）イノベーション戦略部門 部門長 （兼）大学院工学研究科教授
杉本 諭	国立大学法人東北大学 副理事（産学連携担当）
○ 須藤 亮	公益社団法人日本工学会 会長
南部 智一	住友商事株式会社 取締役 副会長
水落 隆司	三菱電機株式会社 研究開発本部 シニアフェロー
室田 浩司	国立大学法人京都大学 副理事（社会連携・イノベーション推進担当）
吉本 陽子	三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社 政策研究事業本部 産業創発部 事業戦略グループ 主席研究員

SIP制度中間評価の進め方



第1回SIP制度中間評価WG議題

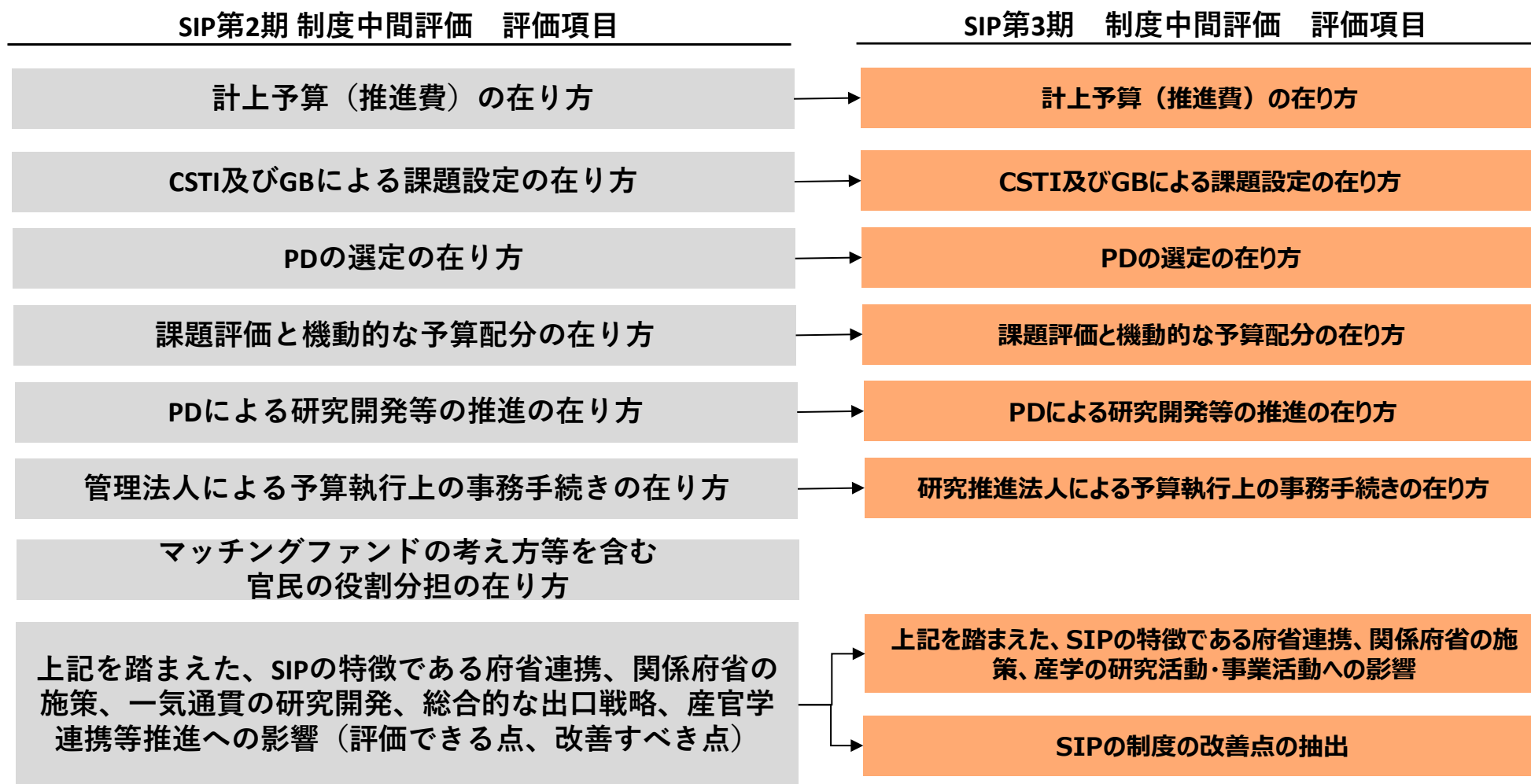
1. SIP第3期制度中間評価WG 議事運営規則（案）について
2. 座長の選出について
3. SIP制度概要と中間制度評価について
4. SIP第3期制度中間評価アンケート概要
5. 若手研究者として見える課題と可能性
6. 米国DARPAの取り組み
7. その他

第2回SIP制度中間評価WG議題

1. SIP第3期制度中間評価アンケート結果等について
2. SIP第3期について
3. 伴走支援について
4. 広報活動について
5. 第1回WG振り返り、改善すべき点と対応策案について

3. アンケート調査概要①

■ SIP第3期制度中間評価 評価項目案の検討



3. アンケート調査概要②

■ SIP第3期制度中間評価 アンケート実施概要

- アンケート調査実施概要は以下の通りです。

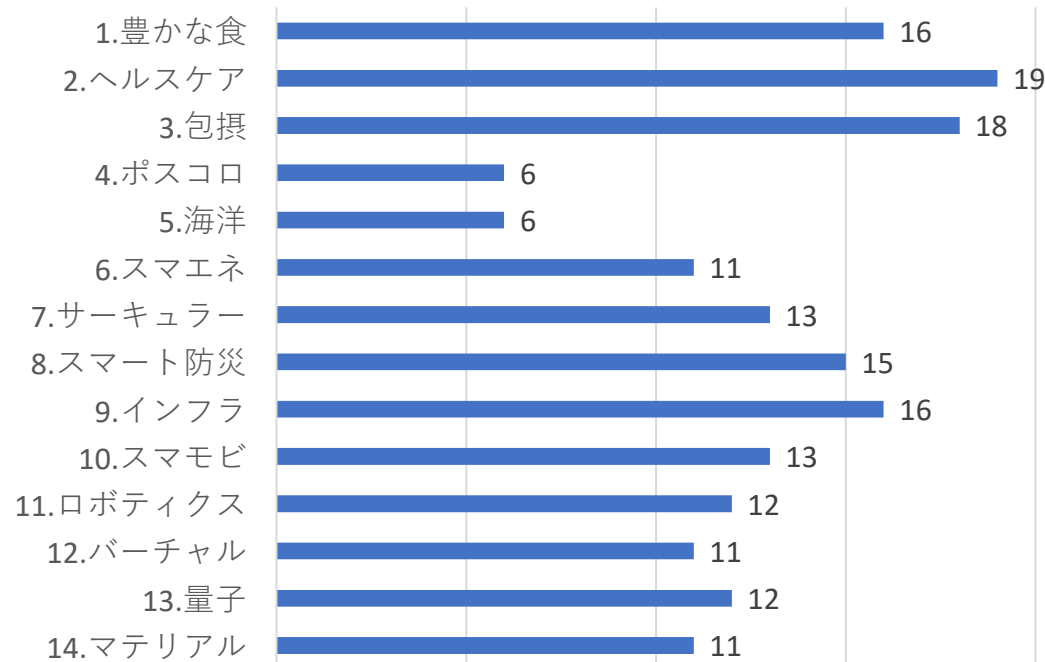
【実施期間及び実施手法】

2025年11月21日から 2026年1月23日 MS FormsおよびExcelシートにて実施

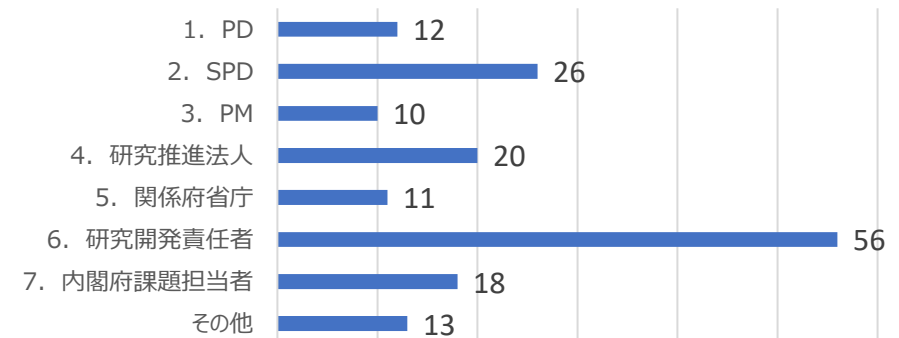
【総回答数】

166件（うち、Excelでの回答受領は20件）

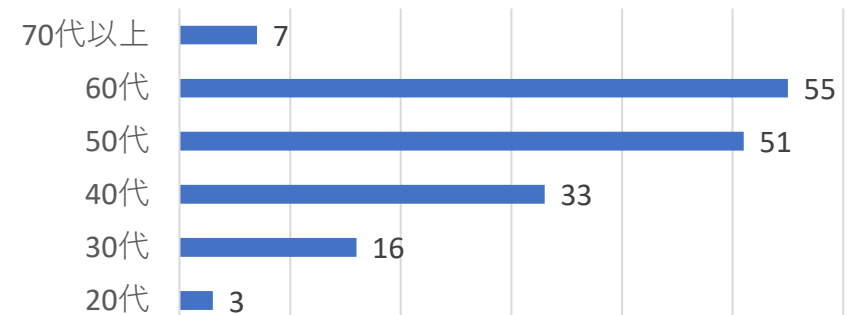
問0-6. SIPの参画課題



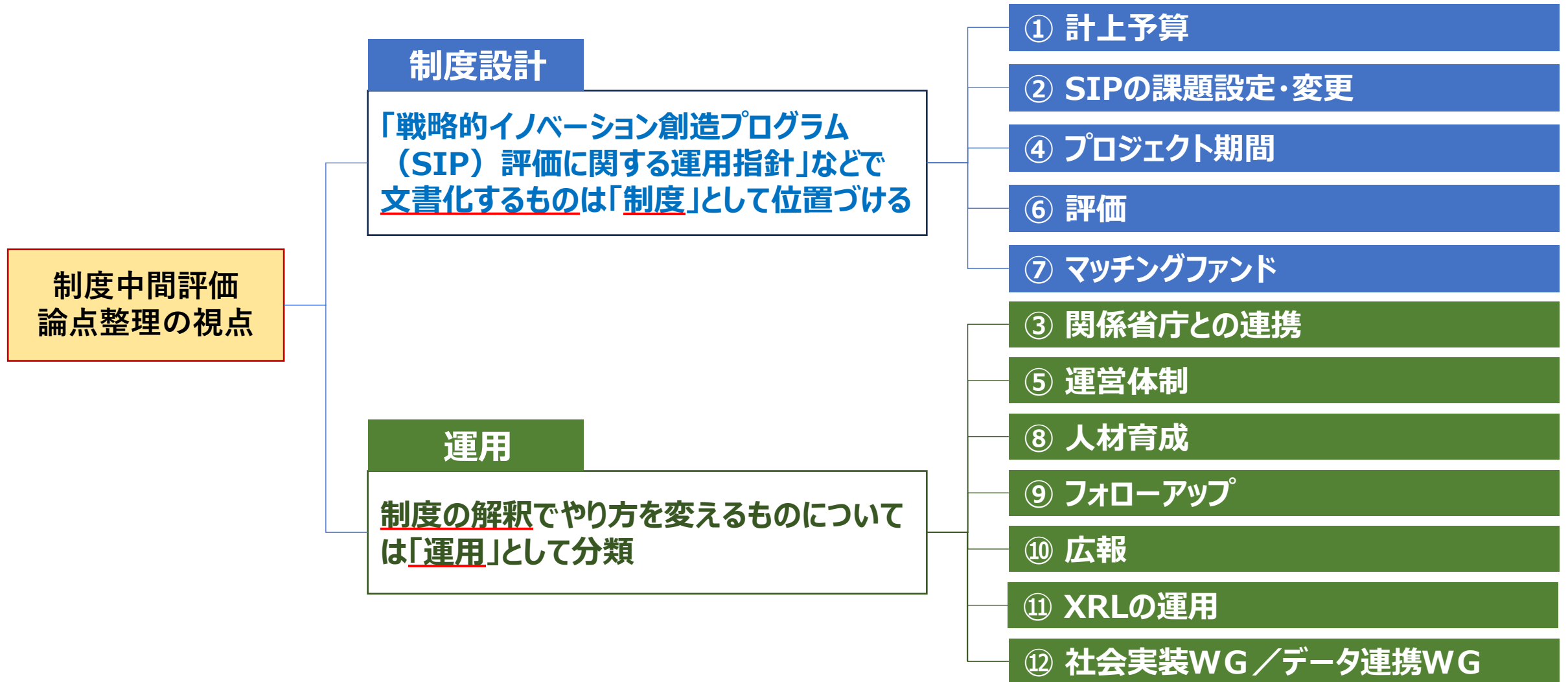
問0-8. SIPの運営における立場を選択ください



問0-4. 年代



論点の全体像（制度／運用）



論点の全体像（制度／運用）

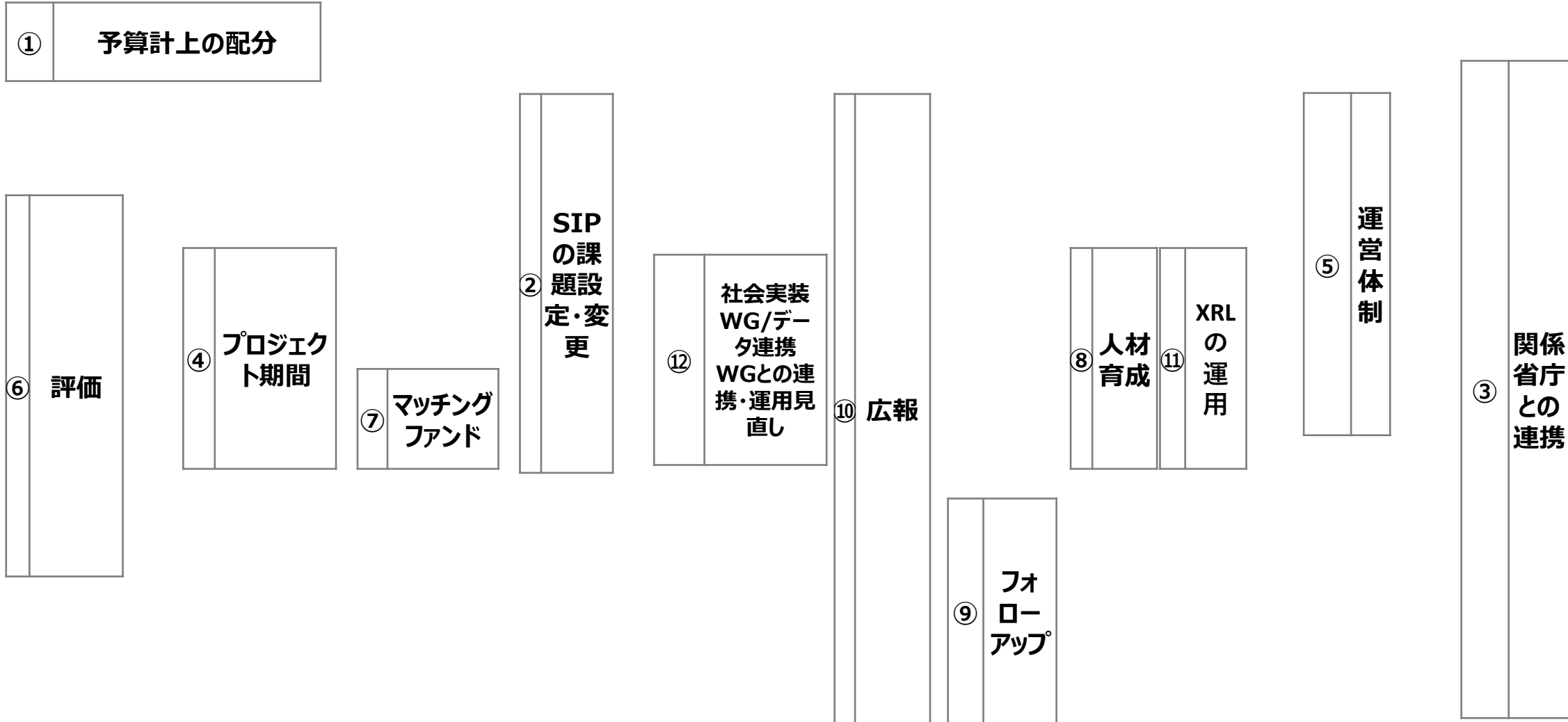
制度設計

運用・運営

実施前

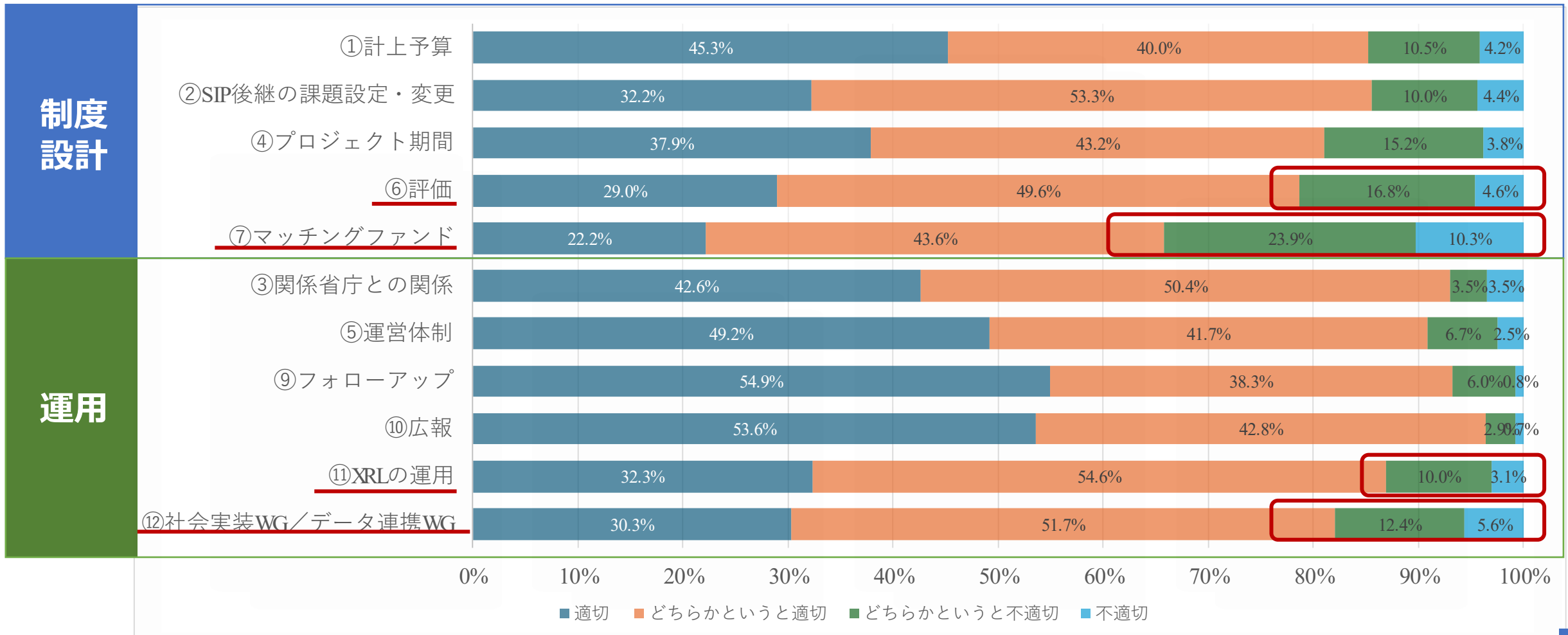
実施中

終了後



4. アンケート調査 結果概要

各項目とも「適切」又は「どちらかという適切」が、概ね70%以上であるが、制度設計では、「⑥評価の進め方」「⑦マッチングファンド」において、また運用面では、「⑪XRLの運用」「⑫社会実装WG/データ連携WG」において、「不適切」又は「どちらかという不適切」が多い。



① 予算計上の配分 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- 一部「不適切」との回答は見られるが、**総じてどの課題でも「適切」寄り**の回答。(7、8割程度)

【属性（役割）観点】

- 全体として、**制度設計として「適切」寄りの評価、PDへの権限集中も適切**である。(9割程度)

【その他自由回答】

- 評価を踏まえてもっと劇的に変化させていただきたいと思う。研究成果が良好に進めば進むほど、着手時には分からないことは、次々に現れるものである。成果（評価）に応じて、柔軟かつ大胆な配算がなされるべきだと思う。

【論点・検討ポイント】

- 予算計上における配分に対する考え方の再検討が必要。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 成果に応じた大胆な配算や重要な課題に対して傾斜配分など、配分に対する考え方を見直す。

② SIPの課題設定・変更 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- バックキャストアプローチやFS・RFIを通じた課題設定は、**総じてどの課題でも「適切」寄りの回答**。(7、8割程度)
- **課題戦略及び計画立案期間は全課題通じて「不適切」寄りの回答**。(2、3割)
- 立案期間に対する課題別の不満は共通。

【属性（役割）観点】

- 全体として、**課題設定に関して制度全体として「適切」寄りの回答である**。(7、8割程度)
- **マネジメント側**からは、**バックキャストによる課題テーマ選定や、FSにおける研究開発期間の設定に関して、「不適切」である回答が散見**される。(1割程度) **研究側**からは、**おおむね「適切」であるとの回答**。

【その他自由回答】

- フィージビリティにより、研究計画、タイムライン、予算、人員、研究体制、研究成果の活用、社会実装の事業計画を熟考できた。
- 調査分析機関との契約締結に時間を要したため、FSの期間が半年程度しか確保できず、調査が十分に行えなかった 常に状況を把握して実施内容へと反映、参画者や協力機関の増強もフレキシブルにできる体制は、他の国プロには見られない効果的な取組

【論点・検討ポイント】

- 科学技術・イノベーション基本計画等に掲げられた将来像からのバックキャストに加え、「科学とビジネスの近接化」を踏まえ、PDが「課題解決」と「機会の創出」（「課題の発見」）を可能とする視点も含めた課題設定ができるようにするなどフレキシブルに方向性が変更されるとよい。また、各省庁が進めている科学技術政策に関する取り組みと内閣府SIPの取り組みとの整合性を考慮する必要がある。
- スタート時の設計が重要であり、PD選定後の課題設定に時間をかける必要がある。SIP第3期の課題設定時と同様に、SIP後継でもFSにより課題の調査すべき。
- 基本計画専門調査会で取りまとめた重要技術領域等を踏まえつつ、SIP後継では課題を設定すべき。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 科学技術・イノベーション基本計画において設定する新興・基盤技術領域や我が国が実現を目指す将来像からのバックキャスト、その他動向からのフォーキャストの視点を踏まえ、ターゲットとすべき領域を検討する。
- ターゲット領域からSIPで取り組むべき課題を設定するための事前調査（FS）を実施し、FSの中で、ターゲット領域における本質的な課題の探索を行う。
- FSおよびSIP期間中に発見された新たに取り組むべき課題については、PD裁量やCSTIからの追加予算により柔軟に課題を設定できるようにする。

④ プロジェクト期間 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- プロジェクト実施期間は、**全課題に共有して「不適切」寄りの回答が一部見られる。**（2, 3割程度）
- 「不適切」と回答した者のうち、望ましい課題実施期間は、**2年から3年がボリュームゾーン。**

【属性（役割）観点】

- 全体として、**プロジェクト期間は「適切」であったとの回答が多い**（8割程度）。
- 「5年」未満の回答では、**マネジメント側、研究側で「2年」や「3年」の回答はあるものの、割合としては、あわせて2割程度。**

【その他自由回答】

- 適切と考えますが、世の中の動きの速さを想定すると今後は短くすることを検討したほうが良いかもしれません。
- 5年を基準とすることは適切と考えるが、課題の性質によって早期や延長があっても良く、その都度ステージゲートを行い判断するのが良いと考える。

【論点・検討ポイント】

- 5年以上にわたる長期開発が基本という枠組みを見直し、3年程度のプロジェクトも実施する等のアジリティを確保すべきである。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 課題に応じて3～5年間のプロジェクト期間を設定する。

⑥ 評価 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- ピアレビュー以上に、**ユーザーレビュー**には対して、課題共通で「**不適切**」寄りの回答が多い。(4、5割程度)
- ステージゲートの制度運用**に対しても課題共通で「**不適切**」寄りの回答が多く見受けられる。(3割程度)

【属性（役割）観点】

- 全体として、**評価システム、中間評価、制度運用を含めて「妥当」**であるという回答が得られた。(8割程度)
- 一方で、**ユーザーレビュー及びステージゲートの運用に関しては、研究推進法人において、「どちらかというと不適切」「不適切」という回答をあわせて4割強を占めている。**

【その他自由回答】

- ステージゲートによって客観的な指摘を基にした冷静な判断を下すことへと導かれるため、PDとしては有意な制度であると思う。
- 実質2年弱の研究開発期間において、評価のために多量の資料作成を求めることは、作成側に過度な負担を強いるとともに、評価側にとっても十分な検証材料を得にくいという課題を生じさせている。

【論点・検討ポイント】

- 細かいポイントまでコントロールするとスピーディな課題の推進が難しい。運用指針に沿うよう方向性は揃えつつ、PDが権限を持ち、推進しやすくすることが重要。また、課題の性質や外部環境の変化等を踏まえた評価を行うとともに、評価の頻度を見直し、評価に係る負荷軽減を図る必要がある。例えば、伴走支援などを行いつつ、毎年度の課題評価は進捗確認とアドバイスにとどめるべき。
- 配分予算の変更は課題中間評価時の評価のみとすべき。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 課題評価の目的は予算配分ではなく、課題のビジョンの実現に向けた進捗状況を確認し、研究の方向性や社会実装に向けたアドバイスを行い、課題のビジョン達成を支援することである。本目的を達成するため、過度な課題評価を求めないものとする。毎年度の課題評価は実施せず、その代わりに、平時からプログラム統括チーム等が課題推進を伴走支援して進捗を確認し、適切なタイミングでアドバイスを行えるようにする。
- 課題中間評価までは予算を変更しないようにするが、課題中間評価ではこれまでの進捗状況、環境変化等を踏まえ、課題のビジョン、配分予算を大きく変えるような評価方法を検討する。また、評価の際には課題の性質や外部環境の変化等を考慮する。

⑦ マatchingファンド に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- 産業界と協調・連携した民間企業からの貢献に対しては、**全課題おおむね「適切」**との回答（9割程度）。一部課題では「不適切」寄りの回答が散見される。
- **マッチングファンドを課題要件**としている点や**マッチングファンド活用の制度設計**は、**課題横断で「不適切」寄りの回答が多い**。（4、5割程度）

【属性（役割）観点】

- 全体として、**マッチングファンド制度については、概ね「妥当」**であるという回答が得られた。（7割程度）
- 一方で、研究推進法人からは、**民間企業の加の仕組み、制度設計の観点で「どちらかというと不適切」「不適切」であるという回答が過半を超えている状況であり、現状からの変更が求められている状況。**

【その他自由回答】

- マatchingファンド方式は、公費への過度な依存を避ける観点から有効であるが、民間資金を活用できる程度は各テーマにより異なるので、柔軟な運用が望ましい。
- ファンドより補助金の方がわかりやすい。

【論点・検討ポイント】

- SIP第2期よりマatchingファンド方式を適用しているが、マatchingファンドに係る事務が煩雑である。民間企業の参入を促進するために納得性が高い仕組み（インセンティブ）を検討すべき。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 事務的な負担やリスクに対する企業投資の促進などの観点からマatchingファンドの仕組み等を見直す。

③ 関係省庁との連携 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- どの課題でも総じて、SIPの取組や制度設計は、関係省庁の連携や産学連携へ良い影響があると評価。(7、8割程度)
 - 一部課題は否定的回答あり

【属性（役割）観点】

- 役割にかかわらず、SIPの取り組みや制度設計はおおむね良い影響を与えられているとの評価。(7割程度)

【その他自由回答】

- 府省連携プロジェクトであること（が優れた点）府省連携の枠組みは、期が始まってから考えるのでは遅すぎるので、遅くともFS期間内に構築してほしい。
- トランスフォーマティブイノベーションを実現するためには府省連携の取り組みが必要であり、また、社会実装のためには技術だけではない取り組みも必要であることを踏まえて様々な制度を試行錯誤してきているところは優れた仕組みである。

【論点・検討ポイント】

- SIPでは関係省庁にまたがる課題の推進が重要であり、PD同士の連携による関係省庁への働きかけなど、関係省庁を巻き込む仕組みが必要。また、FSの時点で関係省庁とのスコープの調整等も含めた連携方法の検討をすべき。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 事前調査（FS）の時点から、課題における省庁取り組みとの整合性、合意を取ることで関係省庁との連携を開始する。
- 推進委員会の見直しやPD連携による関係省庁への働きかけなど、関係省庁がより深くSIPに関与する仕組みを検討する。

⑤ 運営体制に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- 総じてどの課題でも「適切」寄りの評価。(8割程度)
- **プログラム統括Tの設置は、全課題通じておおむね「適切」と評価されている。**

【属性（役割）観点】

- 全体として、属性にかかわらず「適切」寄りの回答が主である(7割程度)ものの、**研究推進法人においては、研究責任者選定方法に対して「不適切」よりの回答。**(1割強)

【その他自由回答】

- 多くの参画者は研究者や技術者であるため、経営層やマーケティング、戦略部隊の参画も必須と考える。
- 社会実装をアウトカムにするためには、アカデミアがテーマ代表をする場合は、社会実装責任者とツートップの体制で応募することをマストの制度にしないと運営が大変であるというのが3年間PDをした一番の実感です核となる研究者とPDについてはSIP課題の期間中は専任として取り組むことができるような人事制度も検討の余地があると思う。

【論点・検討ポイント】

- SIPではPDの存在が重要であり、優れたPDを集めるため、利益相反への対応も含めインセンティブを検討すべき。産業界からのPDの場合、出身元企業のSIPへの参画やPD等をバックアップするサポート体制、インセンティブ等について検討すべき。また、社会実装を実現するためにSIP開始時より研究開発や社会実装の知見・ノウハウを持つメンバーで構成されるような体制づくりを検討する必要がある。
- 課題内部、課題間、課題と評価者、課題と関係省庁とのコミュニケーションを効率よく機能させることが重要。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- SIP第3期の利益相反マネジメント、設置した第三者委員会についてレビューし、SIP後継におけるPDに対するインセンティブやサポート体制についての改善を検討する。
- 社会実装に向けてSIP開始時より研究開発や社会実装の知見・ノウハウを持つメンバーで構成される体制づくりを検討する。
- PM等を活用した課題内での情報共有の促進、プログラム統括チームによる伴走支援等を通じた課題間の情報共有など、課題内部、課題間、課題と評価者、課題と関係省庁とのコミュニケーションを効率よく機能させる仕組みを検討する。

⑧ 人材育成 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- アンケート設問での個別質問なし

【属性（役割）観点】

- アンケート設問での個別質問なし

【その他自由回答】 ※アンケート自由回答から抜粋

- SIP制度が第3期以降も、継続していく点が最も重要。PDやSPDを務めた人が「SIPのPDをやった」と言って社会的、学術的に評価されるようになる。そうすれば、中堅で実力のある人がPD、SPDを務めてくれるようになる。
- イノベーションや大規模な研究開発はチームサイエンスが適切な体制であり、その場合、様々なセクターとの協働が理想的である。特に人材育成に係る研究においては必須といって過言ではない。

【論点・検討ポイント】

- 研究マネジメントを指向する若手研究者に対して次世代のPD、SPD、研究開発責任者を担う人材のための育成方法として、例えば、PD補佐に若手を登用するなど課題内マネジメントへの若手採用や、サブ課題間等で領域を横断するフォーラム担当に若手を任命することなどが考えられる。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 研究マネジメントを指向する若手研究者のための若手の登用や人材育成の方法を検討する。

⑨ フォローアップ[°] に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- ・ フォローアップに関連して、**エグジット戦略の明確化はどの課題でもおおむね「適切」と評価**（8割程度）
 - ・ 「不適切」寄りの回答は一部課題にとどまる

【属性（役割）観点】

- ・ **エグジット戦略の明確化に関しては属性によらず概ね「適切」という回答。**（8割強）

【その他自由回答】

- ・ 研究推進法人を引き受けるインセンティブをより高めてほしい。例えば、予算が研究推進法人の運営費交付金として配分されているので、SIP終了後も余剰金を関連活動に使えることとしてほしい。
- ・ SIP終了後に重要なプロジェクトを伸ばす仕組みは必要。

【論点・検討ポイント】

- ・ SIP終了後の社会実装状況のフォローアップ等のための仕組みを検討すべき。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- ・ BRIDGE制度を含めたフォローアップの支援の見直しや支援の類型化・ポイントの整理（ノウハウや失敗事例の蓄積）の定期的な収集・発信の加速。

⑩ 広報 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- **研究開発成果の情報発信については、全課題で「適切」寄りの回答。**
(9割程度)
 - 「不適切」寄りの回答は一部課題のみ
- 広報を通じた関係府省連携についてもおおむね「適切」寄りの評価。
(8割程度)

【属性（役割）観点】

- **研究開発成果の情報発信については、属性にかかわらず「適切」寄りの回答。** (9割程度)
- **広報を通じた関係府省連携に関しても属性によらず「適切」寄りの評価。**

【その他自由回答】

- HP上の情報共有を見ても、SIPの進捗や成果が利用者目線で分かりやすくなっているとは感じたい。掲載論文名や発表学会名の列挙にとどまっているという認識である。
- 課題として統合的なパンフレット資料等を作成していると認識しているが、よりサブ課題にフォーカスした情報発信がHP上でされると良いと感じる。

【論点・検討ポイント】

- SIPで得られた成果を日本国民、研究者、産業界並びに国際的にアピールするため、適時・適切な情報伝達による戦略的広報を行うべき。また、過去のSIPも含め、活動内容、成果のアーカイブが必要。
- SIP広報の費用対効果を測定したうえで効果的な広報戦略を検討すべき。
- 研究者、産業界には、SIPに参加するメリットを示していく。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 戦略的にメディアへ露出する方法を検討する（新聞・雑誌などの特集、テレビ番組企画、動画コンテンツ、パンフレットの作成、課題からの広報に対する評価）。
- 上記と連携し、過去のSIP成果のアーカイブなど、Webによる情報提供方法を見直す（ホームページ再設計、SNS連携等）。
- 課題において、広報戦略を策定し、課題からの広報を積極的に評価する。SIP広報の効果を踏まえつつ、各課題による社会実装に向けた広報の戦略的实施もサポートする。具体的には、広報に資する成果が得られた場合の積極的なマスメディアへの訴え、課題分野における学会、展示会へのSIPブース出展なども含む。

⑪ XRLの活用 に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- XRLの活用における計画策定や進捗確認は、**課題間で強弱は見られるが、総じて「適切」寄りの回答**。（7、8割程度）不適切寄りの回答は一部
 - XRLの活用に関する**課題別の認識差異は特段見受けられず**

【属性（役割）観点】

- XRLの活用における計画策定や進捗確認は、**属性間での強弱は見られるが、総じて「適切」寄りの回答**。（7、8割程度）不適切寄りの回答は一部。

【その他自由回答】

- 契約コンソーシアム(実施事業者)によって、XRLのそれぞれの段階の理解が違う場合がある。XRLのそれぞれの段階の詳細な定義や事例があると助かります。また、XRLを社会的にも周知する活動をしていただくと、さらに良いと思います。契約コンソーシアム(実施事業者)へのXRLの理解を深めてもらいたい。

【論点・検討ポイント】

- 課題の特性に応じて、パターン分け、事例の共有、運用に関する助言・支援の拡充が必要。
- 共通の指標（XRL）や運用の考え方は必要であるが、評価等に使用するための指標ではないことは改めて周知・浸透が重要ではないか。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- XRLの活用促進にむけて課題の特性に応じたパターン分け、事例の共有、運用に関する助言・支援の拡充を検討する。
- XRLの位置づけや意義、活用方法は引き続き浸透を図る。

⑫ 社会実装WG / データ連携WG に関する論点・ポイント

【課題別/課題類型別のポイント】

- 社会実装に向けたWG制度・体制やフォローアップの運用は、**課題ごとの評価が分かれており、総じて「適切」寄り**ではある（5、6割程度）ものの、**「不適切」寄りの意見は一定数**見られる（2、3割程度）。

【属性（役割）観点】

- 社会実装に向けたWG制度・体制やフォローアップの運用は、**属性ごとの評価が分かれ、総じて「適切」寄り**ではある（5、6割程度）ものの、**「不適切」寄りの意見が一定数**見られる。

【その他自由回答】

- WGでの議論内容が、内閣府・研究開発推進法人からの指示にどのように反映されているかが不明瞭であり、個別の研究者にまで落ちているように感じられない。データ連携WGが開催され、目論見書の提出が求められる場合、データ連携が目的化してしまう懸念があります。研究成果を拡大する観点からは、課題によってはデータ連携が必ずしも適切でないケースも考えられます。そのため、データ連携に限定せず、より広く課題間の連携を促進していただけると望ましいと考えております。

【論点・検討ポイント】

- 社会実装WG等の在り方を再検討するとともに、課題側の打ち手や取組検討を伴走できるような支援の拡充を行うべき。
- ガバニングボードや各種WGの活動・成果は課題内で共有されておらず、継続的に取り組むにあたっては、課題内でも意義や成果の透明性や浸透を担保する機会が有用。

【当該論点での制度評価・今後への反映事項】

- 社会実装WGやデータ連携WGの目的の明確化やメンバーの見直しを行うとともに、社会実装やデータ連携に向けた伴走支援の充実を図る。

6. SIP第3期制度・運用における主な改善点・対応策

制度設計	改善すべき点	対応策
SIPの課題設定・変更	<ul style="list-style-type: none"> PDによる課題設定のフレキシブルな方向性の変更 社会課題の解決を促進する観点からe-CSTI等のツールの活用 	<ul style="list-style-type: none"> SIP実施中に発見された新たな取組課題や外部環境の変化による方向性は、PD裁量により柔軟な変更が可能とする 社会課題の解決を促進する観点から課題領域の設定等においてe-CSTI等のツールを活用する
評価	<ul style="list-style-type: none"> 細かいポイントのコントロールはせず、運用指針に沿うよう方向性を揃えて、PD権限による推進のしやすさを重視 課題の性質を踏まえて評価内容（項目）等を見直すとともに、評価頻度を見直し、評価に係る負荷軽減 社会実装に向けた伴走支援なども検討、毎年度の課題評価は進捗確認とアドバイスに限定 	<ul style="list-style-type: none"> 平時からプログラム統括チーム等が課題推進を伴走支援する 毎年度の課題評価は進捗確認とアドバイスにとどめ、中間評価までは予算を変更しないが、課題中間評価時点の進捗状況、環境変化等を踏まえて、課題ビジョンや配分予算の大きな変更を伴う評価方法に見直す
SIPの位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> 科学技術政策におけるSIPの位置づけの明確化 	<ul style="list-style-type: none"> 日本成長戦略の17の戦略分野や第7期科学技術基本計画における重要技術領域を踏まえつつ、科学技術政策におけるSIPの位置づけを明確化する
PDの選定方法・任期制限	<ul style="list-style-type: none"> 様々な関係者からPD等を募る方法の検討 PDの任期の明確化 	<ul style="list-style-type: none"> 社会実装の実現に向けて真に必要と認められるPD等を選定する仕組みを検討する（国内外問わない） PDの任期は最長で5年とし、更新は1度限りとする（他の類似の制度でPM等を行っている場合にはそれらの期間も考慮する）
運用	改善すべき点	運用・運営に対する対応策（案）
関係省庁との連携	<ul style="list-style-type: none"> 関係省庁にまたがる課題推進に向けて、関係省庁を巻き込む仕組みが必要 	<ul style="list-style-type: none"> 事前調査（FS）の時点で、関係省庁との連携を開始する 推進委員会の見直しなど、関係省庁がより深くSIPに関与する仕組みの検討する
運営体制	<ul style="list-style-type: none"> 優れたPDを集めるためのインセンティブ設計 産業界出身のPDは、出身元企業のSIPへの参画やPD等をバックアップするサポート体制が重要 社会実装の実現に向けた研究開発／社会実装のメンバーの組み合わせる仕組みの検討 	<ul style="list-style-type: none"> SIP後継におけるPDに対するインセンティブやサポート体制の改善を検討する 研究開発や社会実装の知見・ノウハウを持つメンバーで構成されるような体制づくり等を検討する アカデミアと産業界をつなぐ人材等を含めた社会実装のための体制づくりを検討する
人材育成	<ul style="list-style-type: none"> 次世代のPD、SPD、研究開発責任者を担う人材の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 研究マネジメントを指向する若手研究者のPD補佐への登用や人材育成方法を検討する
データ連携	<ul style="list-style-type: none"> SIPとして課題間で活用するための基盤を構築していくとともに、データ連携基盤の全体像も明確化 	<ul style="list-style-type: none"> データ連携基盤を構築する